（様式１）

研修№.８１

2022 年度 病院医学教育研究助成成果報告書

報告書提出年月日	2023年　　3月　　29日
研究・研修課題名	第5回AYA世代がんサポート研修会
研究・研修組織名（所属）	子どもとAYA世代サポートセンター
研究・研修責任者名（所属）	安田　謙二
研究・研修実施者名（所属）	成相　晴美

成果区分	□学会発表　□論文掲載　□資格取得　□認定更新　□試験合格 □単位取得　■その他の成果（該当なし ）
該当者名(所属)	
学会名(会期・場所)、認定名等	
演題名・認証交付元等	
取得日・認定期間等	
診療報酬加算の有・無	□加算有（　　）　□加算無

目的及び方法、成果の内容

①目　的

現在、子どもと AYA 世代サポートセンターの一員として活動をしている。支援の対象者にはがん患者当事者やそのご家族がおられ、チーム内のソーシャルワーカーと役割として心理・社会的側面の支援に関わらせていただいている。

さまざまな疾患、傷病による治療中の患者さんからは治療の内容や医療費をはじめとする経済的な問題や仕事との両立、介護や療養先の相談があるが、AYA 世代の患者さんについてはその上に成長発達段階の課題が加わる。それぞれのライフステージにおける悩みに絡めてがん治療による医療的課題、心理社会的課題は個別性が高く、就学や就職から結婚、妊孕性、晩期合併症など多様である。これらの課題について、きめ細やかに長期的に患者さんご家族の支援を行うには、AYA がんの特徴や発達課題等について十分な知識がなければ相談援助をおこなうことができない。もともと少数である AYA 世代のがん患者に対する理解や重層的な課題、ニーズに対応するためにはチームの中でのソーシャルワーカーの役割は大きく、患者への直接支援だけでなく、チームメンバーをつなぐ、外部の社会資源とつなぐという調整の役割もある。チームの中でソーシャルワーカーが十分に役割を果たすために専門的な知識を身につけて子どもと AYA 世代サポートセンターのチーム力を高めていきたい。

②方　法

第 5 回　AYA 世代がんサポート研修会　への参加

2022 年 5 月 29 日　WEB 開催

主催　一般社団法人　AYA がんの医療と支援のあり方研究会

研修プログラム　e-learning

講義テーマ

（様式１）

総論

（1）　AYA がんの特徴

（2）　AYA がんの診療実態

（3）　AYA 世代の特徴

（4）　AYA がん患者のニーズ

（5）　AYA がん患者支援におけるチーム医療

ライフスタイルと機能回復

（1）　リハビリテーション

長期フォローアップ

（1）　健康のための自己管理

（2）　二次がん・晩期合併症の管理

社会とのつながり

（1）　就学・就労・社会資源・経済的問題・Ａ世代

（2）　就労・社会資源・経済的問題：ＹＡ世代

社会とのつながり

（1）恋愛・セクシュアリティ

家族の支援

（１）　Ａ世代の家族支援

（２）　ＹＡ世代の家族支援

（３）　配偶者・親・きょうだい・こどもの支援

サポーティブケア

（１）　心理・精神面の問題

（２）　意思決定・コミュニケーション

家族をつくること

（１）　女性の妊孕性

（２）　男性の妊孕性

遺伝性腫瘍に関する問題

サポーティブケア

（１）　エンド・オブ・ライフケア

ピアサポート

（１）　ピアとのつながり、ピアサポートの意味

「楽しく食べる」の取り組み

2022 年 5 月 29 日（日）開催スケジュール

（テーマ）AYA がん患者とのかかわりの経験と課題

総論～家族支援

サポーティブケア～「楽しく食べる」の取り組み

グループワーク①

＊AYA 世代がん患者の妊孕性温存による第 2 子挙児のタイミング

グループワーク②

＊AYA 世代がん患者の子どもの支援

③成　果

そもそも AYA 世代のがん患者は少なく、出会う機会も限られる中、実際にどう接してよいものか、彼らの真のニーズがどこにあるのか漠然としたイメージしかなかった。今回の研修では総論から各論まで多岐に渡り学ぶ機会となった。ライフステージのどこに立っているのかによって就学、就労や結婚、出産などがん患者のニーズは異なる。求められる支援は医学的な内容にとどまらず、心理・社会・経済的問題など多岐にわたること、また個別性が高いことを理解する研修であった。

（就学支援について）

就学においては、訪問教育や院内学級、遠隔教育など患者の体調と社会資源をつなげて教育保証が必要である。学業を継続するということは治療と両立しながら将来の夢に向かって、なりたい自分を目指す基盤となるものである。単位の取得や出席日数の問題、治療の内容や経過、学校の事情などそれぞれの状況や立場を理解した上で連携が必要となる。また同年代の友人とのその年代に当たり前に経験する活動にどれほど参加できるか、社会から孤立しないよう環境調整も大切であることを学んだ。

（就労について）

今回、就労に関してがんを経験していないＡＹＡ世代よりも「働きたい」とう思いが強いことが分かった。「働きたい」という思いにはただ単に収入を得るということだけでなく「社会に出たい」「地域や社会に役立ちたい」という気持ちにつながっている。就労とは経済的自立を意味するだけでなく、社会とのつながりを持ち、また自己実現の場である。治療によって休職や退職を余儀なくされる場合もあるが、社会から離れ孤立することを防ぐためにも、心身の状態に合わせた働き方へのサポート、また復職や再就職の際の人間関係への配慮も大切となる。就労に関しては新規就労、就労継続のためにハローワークや産業医などとの連携やその制度について学ぶ機会となった。がんと診断をされた時点で、治療開始前に離職を考える人も多いが、治療と就労を両立できる方法があることや、休職中に所得を補う制度があることなど、情報のサポートも大切である。治療に関することや医療費、家族のことなど多くの問題に直面するなかで、情報や社会資源につなぐ、一緒に考え伴走する存在があることで心理的負担は軽減できるだろう。

（友人・恋愛・結婚について）

AYA 世代のがん患者には恋愛や結婚、新に家庭をもつというライフステージにありながらも治療が優先で親密な人間関係を諦める方もある。がん治療に大きく影響する問題として妊孕性の問題もあるが非常にデリケートな問題であるだけに、患者や家族自身もどこに相談をしてよいか分からない、治療を遅らせたくないために、その話題に触れることに抵抗がある患者もいると思われる。ましてや患者自身がどこに相談をしてよいか分からない、言い出しにくいことも想定されるため、こちらから積極的に情報提供し、適切な窓口に繋げることも大切である。

（長期支援）

若年でがんに罹患した場合、晩期合併症や後遺症など、治療が終わったのちにも引き続き抱える悩みがある。AYA 世代の場合、就学や就労で転居する可能性も高く、転居先でも同様に相談できる場所を探しつないでいく必要がある。

（意思決定支援）

AYA 世代は意思決定能力が発達する時期である。しかしながら、親から自立していくべき時期にありながらも、治療場面では親に依存しなければならないという葛藤が生じる。治療選択という今まで経験をしたことがないことについて意思決定が迫られる時期ではあるが、多くの患者さんにとって相談相手がいない、ロールモデルがないのが現状である。しかし、86%の AYA 世代の患者が予測された生命予後を知りたいと考えるなど、自分のことは自分で考え決めたいという気持ちは強く、意思決定支援のためには心理的サポート、情報のサポートが必要である。どういう情報をどういう方法で、どのタイミングで伝えるかは本人の発達段階も考慮していくべきであるが、本人の気持ちの揺れに寄り添いながら、時には率直な対話が必要であることを学んだ。

（まとめ）

いわゆる退院支援等で関わる患者さんの中には AYA 世代のがん患者は少ないが、潜在的にはおられるのではないか、利用できる制度（介護保険等）の対象でないため支援依頼が少ないだけで上記に挙げた悩みを抱える患者さんは少なくないのではないかと思う。今回研修を受けたことでがん治療が人生に大きく影響すること、また発達段階により課題が異なりまた個別性が高いことを学んだ。AYA 世代サポートチームではがん患者に限らず、支援依頼のあった患者さん、ご家族に関わらせていただいているが、治療と日々の生活を両立させていくことにおいては難病はじめその他の疾患においても同様である。ただ単に医療費の負担軽減や療養先を探すことではなく、その人がその人らしい人生が送られるよう、夢が実現できるよう多面的、複眼的な視点をもち関わらせていただくことの意味を改めて学ぶ機会となった。